かなはどうして教えたらよいか

小学校に進むまでには、かなも一通り読めるようにしてやる必要があります。今の小学校では、かなが一文字も読めないような状態で就学したら、一学期の学習は大変苦しいものになります。

昔の一年分の学習に当たるほどのものを、一学期くらいでやり終えるのですから。しかも、その学習時間は、昔の半分ほどに減っているというのに。

都市の幼稚園の調査によれば、卒園時にはほとんど全員が五十音を読めるようになっているそうです。このような実態を示している時に、かなの学習は小学校へ進んでから、などとのんびりしていますと、子供が学校に適応できなくなってしまう恐れがあります。

かなは表音文ドですから、石井方式では、その本質にかなった使い方で、これを学習させます。「漢字の絵本（五）」以降で、そういう学習が計画されています。

「お爺さんは、山へ柴刈りに行きました。」のところで、

行かないよ

行きました

行くこと

行けばよい

行こうよ

という変化を通じて、「かきくけこ」を学習させるのです。私は指導主事をして」た時ゝ小学生が「行」は「い」という字だと言って」るのを聞いて驚いたことがありますが、そういう教え方をしている先生が多いのです。

「行」は「いく」という意味の漢字だ、と教えなくてはいけません。ただ、この言葉は、「牛」「馬」と違って、「いか」となったり「いき」となったりするので、変化する「かきくけこ」をつけ加えるのだ、ということを理解させるのです。

もし「行ないよ」とあったら、「いかないよ」と読んで、絶対に「いないよ」などと読まないようにしなければいけません。今の中学生でも、「行ないよ」を「いないよ」と読む者がかなりあるのではないでしょうか。

石井方式では、幼稚園児でも「いないよ」と読む子はいないようにさせています。